

敬愛する作曲家、その軌跡をたどる構成で



演奏会が始まる。

阪田さん、本日は黒ずくめで登場。

少し前からメガネをコンタクトにチェンジして、ぐっとイメージチェンジである。

1曲目「幻想曲」。『ラフマニノフ風な曲であり、ロシアの壮大な大地を思い起こさせる』曲。

2曲目「9つのマズルカ」より3曲。『ショパンのそれへのオマージュとも聞こえる曲』とのこと。

詩曲2曲の演奏ののち、「ピアノ・ソナタ第4番」で前半終了。

後半は「ピアノ・ソナタ第8番」から。スクリャービンが残した全10曲のピアノ・ソナタのうち、最後の完成となったのが、この8番。阪田さんが本日のプログラムの「核」と位置付けた難曲であり、『怪しげさを追求していくかのような雰囲気』がある。プログラムには『東洋的神秘のヴェールをまとう曲』との説明が。

詩曲、練習曲、「儚さ」「アルバム of 綴り」の演奏ののち、ラストの曲「ピアノ・ソナタ第5番」。『大胆さとナイーブさが渾然一体となった曲』を、とてもゆたかに弾きあげてくれた。(楽曲紹介『』内は、プログラムに寄せた阪田さんのコメント等から引用)。

あえてトークをはさまず、演奏のみで繋いでいった2時間半。シンプルにクリアに響く音色が耳に残った。

聴衆の皆様を圧倒する演奏に、みなさん大満足。拍手がやまない。アンコールには、「マズルカ」の作品と、練習曲「悲愴」で応えてくれた。

このリサイタルに向けての練習の日々は猪突猛進だったと阪田さん。充実感あふれる笑顔に、それまでの準備の時間がしのばれる。



知的に色彩豊かに。作曲家の人生を奏でる



終演後のホール、

「ぞくぞくしました！」
「興奮したわ〜」
「ソナタ8番、素晴らしかった。スクリヤー
ビンの美学と人生感を感じました」
「この企画をぜひまた」
「スクリヤービン全集を出してほしい！」
と絶賛の声が上がっていた。

<プログラム>

スクリヤービン

幻想曲 口短調 作品28

9つのマズルカ作品25より

第3曲木短調

第2曲ハ長調

第9曲変木長調

2つの詩曲 作品32

第2曲ニ長調

第1曲嬰へ長調

ピアノ・ソナタ 第4番 嬰へ長調 作品30

ピアノ・ソナタ 第8番 作品66

詩曲 作品59-1

3つの練習曲 作品65

第1曲アレグロ・ファンタスティコ

第2曲アレグレット

第3曲モルト・ヴィヴァーチェ

儚さ 作品51-1

アルバムの綴り 作品45-1

ピアノ・ソナタ第5番 作品53

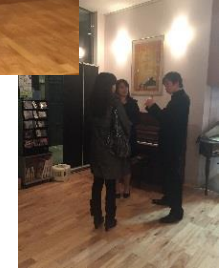
<アンコール曲>

スクリヤービン

マズルカ作品40-2

練習曲「悲愴」作品8-12

使用ピアノ：ベヒシュタイン



終演後のサイン会の様子

終演後の阪田さんに話を聞いた；

—この珍しい企画について；

「…没後100年という記念の年ということもありましたし、好きというか大事にしている作曲家なので、…それだけにフォーカスしてみたいと思ってチャレンジしました」

「…スクリヤービンは名作が多いのですが、せっかく弾くのだから、個人的にすごく好きな8番のソナタへの挑戦が一つの核でした」

「…8番ソナタは、どなたにでもわかりやすい曲というわけではないので、若い時代の作品も織り交ぜつつ、1回のリサイタルで、聴き手の方々がスクリヤービンをどう感じられるか…ということを入念に構成を考えました」

「…いわば音絵巻物のような。そこから始まって、どうなっていくか…スクリヤービンの人生を皆さんに共有してもらえたなら嬉しいです」


終演後のロビーで、「阪田さんのスクリヤービンは『知的で色彩豊かだ』と、つぶやいていた人がいた。皆さんに十分に伝わったものと思われる。

こうした「オール○○リサイタルは、実は阪田さんにとって4回目の企画。これまでに演奏されたのは、リスト、ショパン、ベートーヴェン。次は何を聴かせてくれるのか楽しみだ。

次の演奏会にそなえ、翌日は山梨入りの阪田さん。その後、留学先のドイツに戻るなど、多忙な日々が続く。

阪田さん、素敵な演奏でした。
また聴かせてください！

【コンサート・パンフレット】



スクラヴァフォヴァ (Uspava) というロシアの伝説家からした「ピアノに決闘」"Le duel".

キャピズムの影響を受けたこの作品は、音色の動きとリズムと、そして、古いピアノが特徴的です。88鍵盤という文字のほか、A/Cp.ロシア語でA/Cに同じという文字も見受けられます。

スクリャーピンの曲作りのベースとなるもののひとつに、手や鍵盤に目に見える「美意識」という魅力があったといわれています。

音と色彩は既知をひとつひとつで関連があるとも見えますし、音響的な色彩でも何らかのイメージを浮かぶはたらくさらいらっしゃるでしょう。

たとえば、19世紀にドイツで活躍した詩人、作曲家であるシューベルト(Schubert)の詩について、ハイドンは「戯曲」「戯曲」、その影響は「戯曲」の状況での「戯曲」として残っています。

今回演奏される音のなかにもその魅力をいくつかありますが、スクリャーピンの場合、この中には「戯曲」を、「戯曲」に感じました。

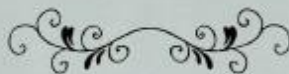
ベシシュタインのピアノはクリアで明確な音色が特徴で、音色を再現しやうい家園といえます。

それは、他の楽器の音、楽器の演奏の音、そしてそれと対峙した楽器にも対応するのですが、いかに音音が響きあっても、決して響かず、音が消えいく間にさまざまな音色の動きを聞くことができる家園-スクリャーピンの曲作りのことを念頭に置いて演奏してゆきたいのでしよう。

スクラフのスクリャーピンの曲作りに対しては、スクリャーピンの影響を受けたベシシュタインのピアノにも影響を受けています。

スクリャーピンの曲作りの音色の演奏、演奏者のイメージーションとテクニクによって、楽器の音への響きの広がります。

スクリャーピンの没後100周年記念




阪田知樹

オール・スクリャーピンのリサイタル

2015年11月20日(金)

18:30 開場 19:00 開演

汐留ベシシュタイン・サロン



オール・スクリャーピンのリサイタル
"Homage à Scriabine"

今年没後100年を迎える早稲のロシア人作曲家、アレクサンデル・スクリャーピンの1874-1915。40歳という短い生涯ながらそのほとんどをピアノ音楽に費やし、数々の名曲を生み出した。しかし、驚くには当たらない、若き日の彼のアイドル、フレデリック・ショパンに似て、その生涯の全てをピアノ曲に捧げているのだから。

ラマニニアのロシアの作曲家と対峙したとき、ショパンのそのへのオマージュとも呼べる「マズルカ」、大抵そのイメージが深淵に達した「ピアノ・ソナタ第3番」そして、彼の遺したピアノ・ソナタ第30曲のうち最後に完成した楽作の最後の「ソナタ」を全う「ピアノ・ソナタ第30番」。

作品群、それそれ同一人物から生まれたとは思えない程、異質に感じられるかもしれないが、それはスクリャーピンのという多面的な作曲家ならではの魅力であり、彼の没するまで以上見よう。

前半には初期のロマンティックな音楽、後半は現実と夢とを自由に駆け回る中期の作品と神秘的な響きを見せる後期の作品を配した今夜のプログラム、音の軌跡を辿ることが出来たらと願う。

- 阪田知樹

- ・ 幻想曲 短調作品28
Fantasie al minor Op.28
- ・ 9つのマズルカ作品25より
 - 第1曲 短調
 - 第2曲 長調
 - 第3曲 変奏短調
 - 4 Mazurka Op.25
 - No.1 mi minore
 - No.2 ut major
 - No.9 mi bémol mineur
- 2つの詩曲作品37
 - 第1曲 長調
 - 第2曲 変奏長調
 - 2 Poèmes Op.37
 - No.2 ut major
 - No.1 fa dièse major
- ピアノ・ソナタ第3番 変奏長調作品10
Piano Sonata No.3 fa dièse major Op.10

- ・ ピアノ・ソナタ第5番作品66
Piano Sonata No.5 Op.66
- 詩曲作品39-1
Poème Op.39-1
- 3つの練習曲作品65
第1曲 アレグロ・ファンタスティコ
第2曲 アレグレット
第3曲 モルト・ヴィヴァーチェ
- 3 Études Op.65
- No.1 Allegro fantastico
- No.2 Allegretto
- No.3 Molto vivace
- 静さ作品31-1
Fragile Op.31-1
- アルバム・の織り作品43-1
Fragile d'album Op.43-1
- ピアノ・ソナタ第5番作品33
Piano Sonata No.5 Op.33

